

アル・タール出土染織品研究その後

藤井秀夫¹⁾・坂本和子²⁾・岡田浩海³⁾・市橋幹蔵⁴⁾

アル・タール出土の染織品については、1980年、ラーフィダーン I の出版以来、新たにプロジェクト・チームを編成し、全資料の材質、糸、組織、文様、染色等について調査研究を進めている。

これらの資料の中で、ラーフィダーン I（特集記事—イラク、アル・タール出土染織・皮革遺物の研究）で報告した「復原模型」に関する資料（第4章—模型製作 pp.128—150）は、すでにイラク政府の要請により1977年に返還し、原資料はイラク博物館に保管されている。

再調査の結果、これらの資料と同一片と推定されるものから次のような事実が判明したのでここで報告したい。

Specimen 224, 225について

図1と同一片と推定される資料、図2、図3（ラーフィダーン I の Specimen 224, 225）は、図4に示すような単純な技法でありながら、パイル用双糸を7～8本引揃えて表側にパイルを形成し、次の段では裏側にパイルを形成するという方法で両面パイルを作り上げている。

地は、黄（dull reddish yellow）の経糸1本に対し、同色の緯糸2本で経畝織にされ、パイルの段では、経糸3本をひとまとめにして1単位のパイルが形成されている。パイルが作られるとき強く締められたため、経糸は蛇行している。

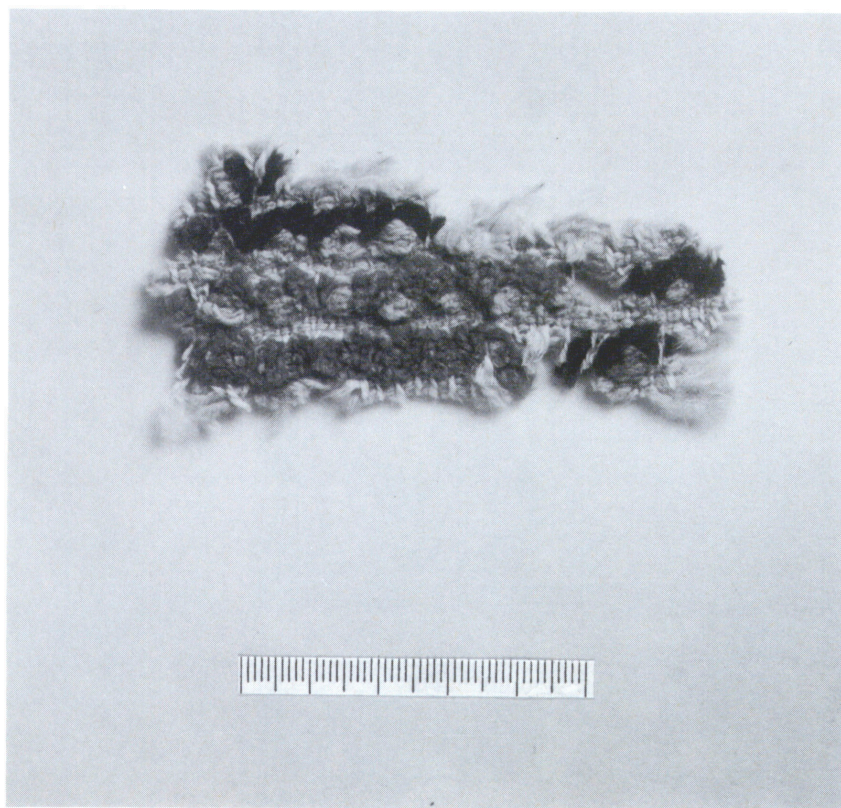


図1 Specimen 226（図版7-1参照）

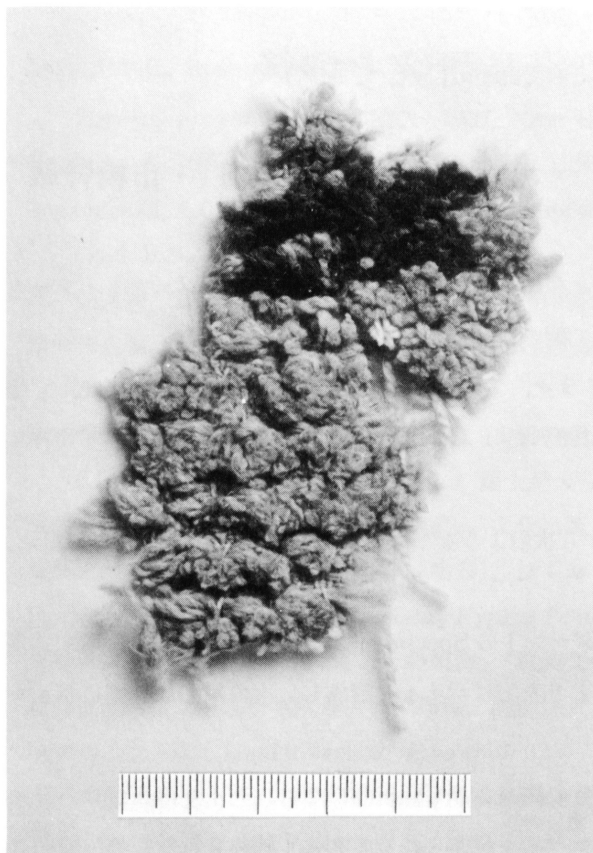


図2 Specimen 224

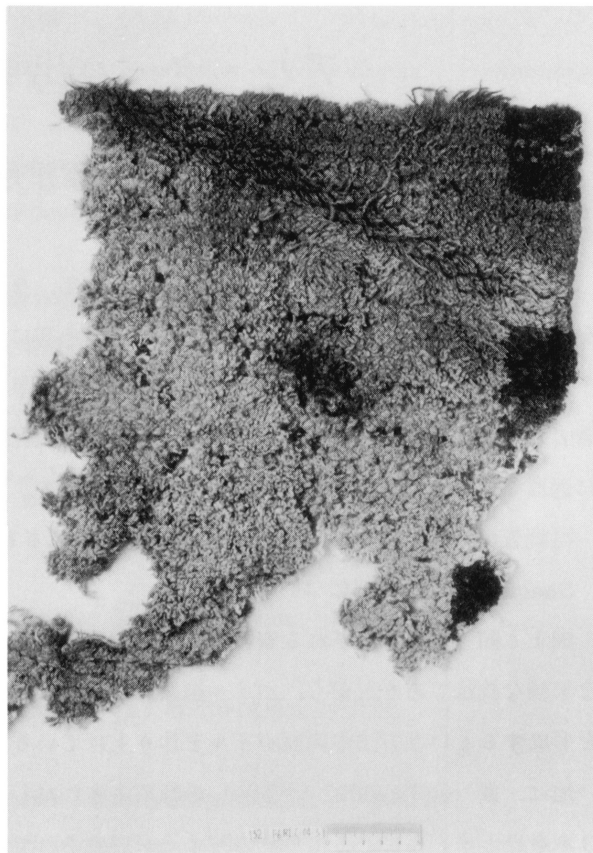


図3 Specimen 225 (図版7-2参照)

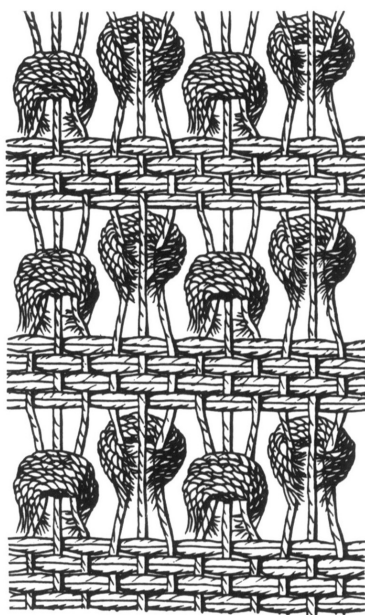


図4 Specimen 224, 225の組織要領図

Specimen 178について

図5は、黄（dull reddish yellow）の地に、紫（grayish purple）のH字形文が織り出されている。図6に示すように地の部分は平組織（plain weave）、文様部分は経糸2本に対し、緯糸1本のよこ畝組織（rib weave）で構成され、文様部分のみ文様を際立たせるため緯糸密度が高い。地と文様の織り始め、織り終りの境界線には経糸の交差が見られる。

経糸交差によって経糸2本を引揃え、組織交錯点を減らし、緯糸密度の高い文様部分が硬くなるのを防いで、地の部分との調和を計っていると考えられる。また経糸交差は文様上下のラインを安定させる効果をあげている。

経糸仕末はZ撚りのY状に仕上げられている。図7に示すように経糸は数センチの長さに切られ、S撚りに下撚りされ、その2束を合せ、さらにZ撚りに上撚りがかけられる。その過程で経糸は5～7本を1単位として交互に下撚りに組み込まれてゆき、仕上りは一定の太さのY状となる。

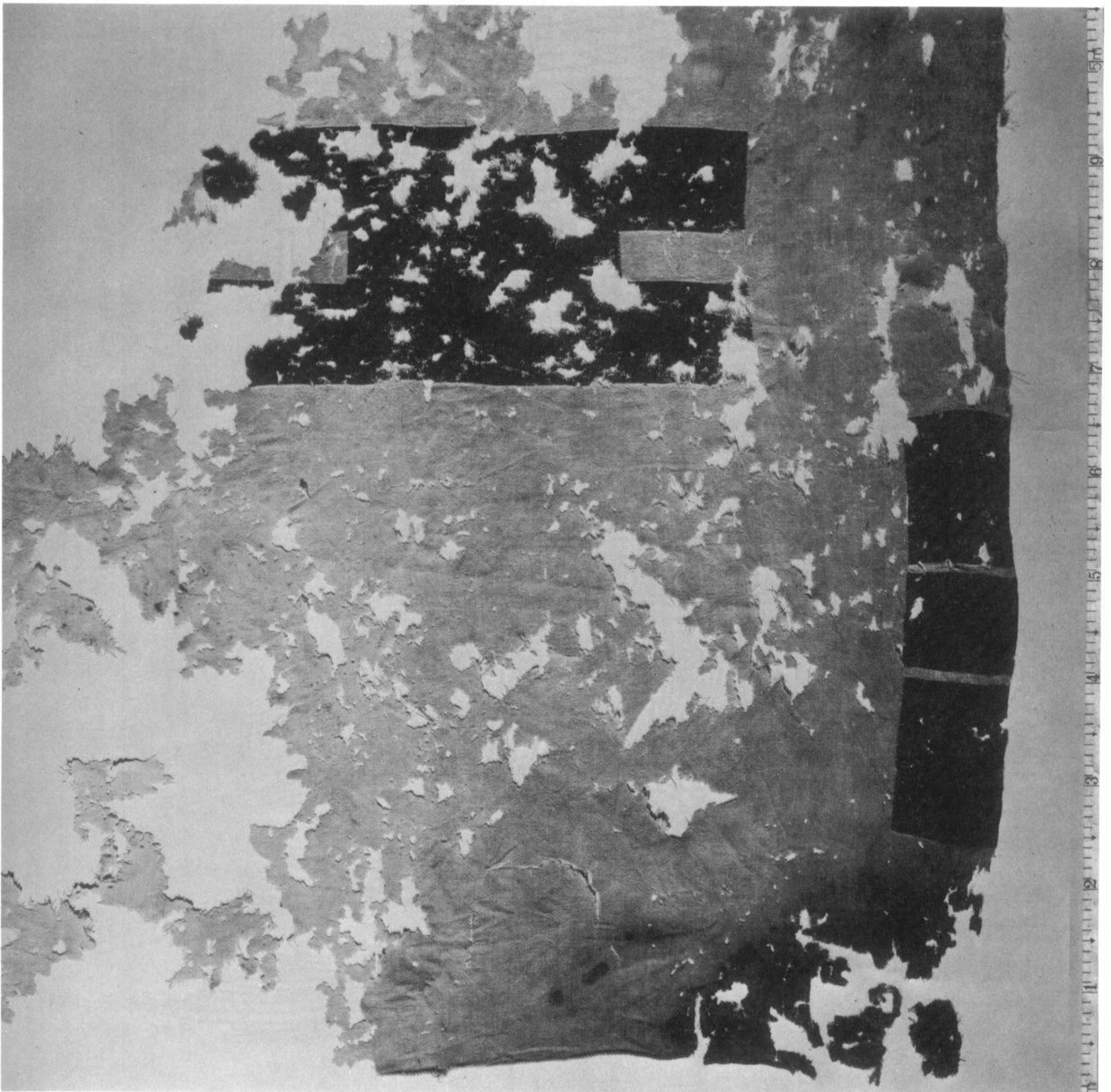


図5 Specimen 178

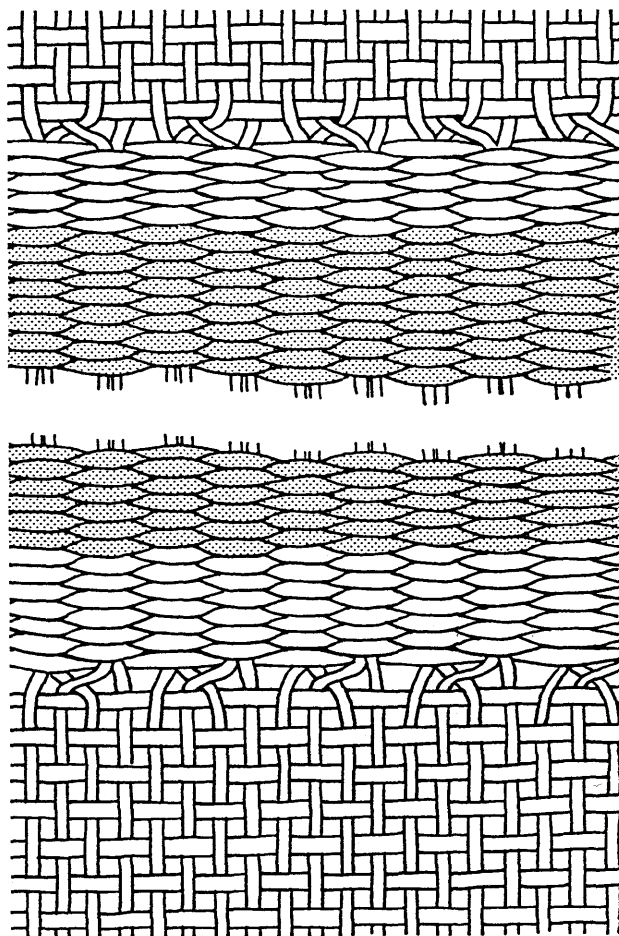


図6 経糸交錯の組織要領図

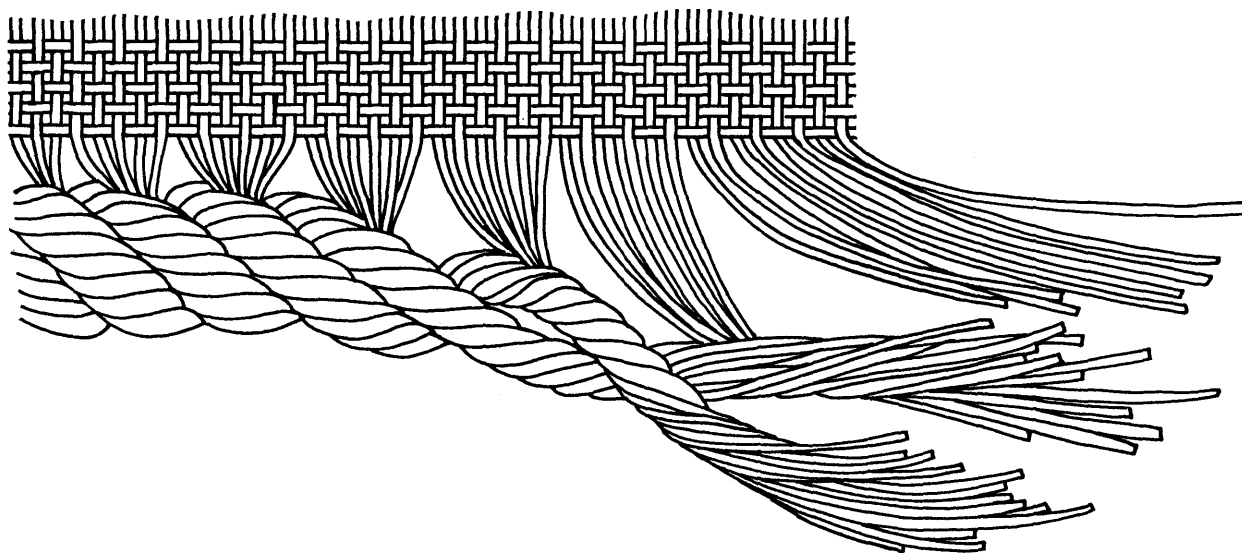


図7 経糸仕末の組織要領図

Specimen 67について

図8の耳は、一見コード状になっているのが観察されよう。耳は緯糸を耳糸（5本どり3列）に繰り返し組織させることによって作られている。

黄（gold）部分と紫（dark red）部分はいずれも平組織（plain weave）で織られているが、紫部分の緯糸は経糸がほとんど見えない程つまっており、黄部分の緯糸密度の約2倍もある。

耳の作り方は、原則として図9のようになる。緯糸はコード状の耳部分では、地の部分の2越に対して4～8越で組織され、耳に厚みを持たせている。これは布地の成形に役立っているように思われる。

また、同一種類の別断片に残るインター・ロック部分では経糸2本どりになっている。

この布はH字形文様のある大布の一縁に配された方形文の一部と考えられる。

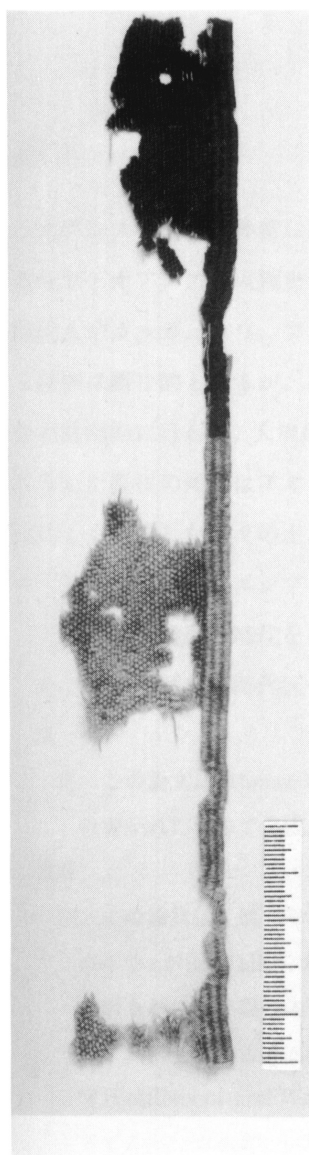


図8 Specimen 67
(図版7-3参照)

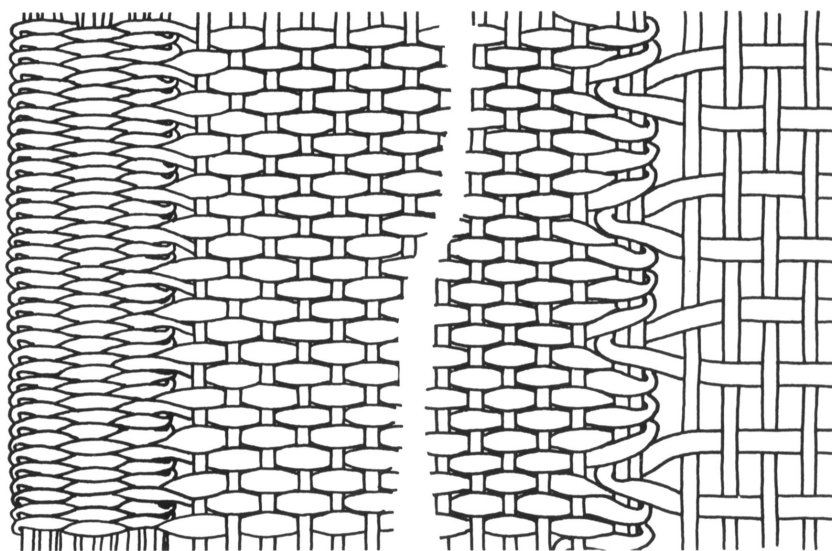


図9 耳の組織要領図

- 1) 国士舘大学イラク古代文化研究所所長・教授
- 2) 国士舘大学イラク古代文化研究所・共同研究員
- 3) 国士舘大学イラク古代文化研究所・助手
- 4) 川島織物テクスタイル・スクール嘱託研究員・
国士舘大学イラク古代文化研究所共同研究員